

監修: 林 糸り子 氏 (藤沢湘南台病院 がん看護専門看護師)

持続皮下注射は、皮下に留置針を穿刺し、極少量ずつ薬剤を投与することで、がん性疼痛、呼吸困難の緩和や、意図的に意識レベルを低下させる鎮静へ対応することが可能です。終末期に伴う衰弱で、嚥下が困難な場合や、体位変換が難しい病態や状態の場合に、注射で早送り(レスキュー薬)を行い、早く発現効果を期待できる利点があります。小型シリンジポンプがない施設もありますので手技についてご紹介し、学びを深めましょう。

#### 持続皮下注射による苦痛緩和

##### 持続皮下注射(CSI)

- 持続皮下注射(CSI)の利点
  - 血管確保が困難な時
  - 食事摂取が困難な時
  - 経口や坐剤など頻回の投与が不要で、患者の負担が少ない
  - 症状、副作用に応じて投与量を微調整が可能
  - レスキュー薬は、早送りのため、急な症状も対応可能
  - 持続的効果が得られる
  - 投与法が簡便であり、容易に開始、中断可能
  - 全身感染を生じにくい
  - 在宅での使用が可能
- 必要物品
- 注射部位の選定ポイント
- 持続皮下注射(CSI)の実際
- 観察ポイント
  - 流量が遅くなった場合、刺入部を温めたり固定が強すぎないか確認
  - 各接続部からの薬液の漏れやルートの屈曲の有無を確認
  - 発赤がある場合はすみやか抜去し、部位を変更
  - 刺入部位の膨隆は1日で吸収するならば経過観察(吸収が遅いようであれば、穿刺部位を変更する)
  - 発赤・硬結に対し少量のステロイド剤の混合を担当医に相談
  - 皮下における薬液の吸収は24ml/日が限界(1.0ml/時)

#### 持続皮下注射(CSI)の利点

- 血管確保が困難な時
- 食事摂取が困難な時
- 経口や坐剤など頻回の投与が不要で、患者の負担が少ない
- 症状、副作用に応じて投与量を微調整が可能
- レスキュー薬は、早送りのため、急な症状も対応可能
- 持続的効果が得られる
- 投与法が簡便であり、容易に開始、中断可能
- 全身感染を生じにくい
- 在宅での使用が可能



#### まとめ

- 持続皮下注射であるCSIの苦痛緩和は・・・
  - 鎮痛薬を含む内服薬が困難な時に対応可能(悪心・嘔吐、消化管閉塞、嚥下困難など)
  - 苦痛(がん性疼痛・呼吸困難など)を短時間で緩和
  - 静脈注射法の血管確保が困難な時でも注射薬が使用



#### 引用・参考文献

- 宮下光令・林糸り子: 看取りケアプラクティス×エビデンス 南江堂 2018 P.29-33
- 服部政治: がん性疼痛治療におけるモルヒネ持続皮下注射の実際について テルモ株式会社 2010
- 森田達也,他(編): 3ステップ実践緩和ケア 第2版 青海社 2018
- 細矢美紀・里見絵理子・岡本禎晃 編著: がん疼痛治療薬 まるわかりBOOK

